

# たった一輪の薔薇

牛島弘登 著



「ヒュー。ヒューー。」  
僕の隣を通り過ぎていく  
風は音を立てて僕の隣を  
駆け抜けていく。冬の真っ只  
中だと言うのに、街ゆく人は  
寒さを知らないかのようにひ  
たすら歩き続ける。もうそろ  
そろ時刻は一時を回る。もうそ  
そろ終電の時間だと言うのに足

がかじかんでうまく動かない。駅  
まではまだ遠い。このままでは終電に間に合わないと  
僕は歩くペースを上げる。辺りはすっかり静まり返り  
僕の革靴が地面を蹴る音が夜の街に響く。ただ、ただ  
歩き続ける。街の隅の街灯の下でしゃがみこんでいる  
女の人とふと目が合う。その瞳は何かを訴えかけるよ  
うな目をしていて。泣いていたようだった。(本文冒頭)



L201  
菊阿文庫



菊 阿 文 庫

L201

た っ た 一 輪 の 薔 薇

牛島弘登 著



菊阿文庫出版



た  
っ  
た  
一  
輪  
の  
薔  
薇

「ヒュー。ヒュー。」

僕の隣を通り過ぎていく風は音を立てて僕の隣を駆け抜けていく。

冬の真っ只中だと言うのに、街ゆく人は寒さを知らないかのようにひたすら歩き続ける。

もうそろそろ、時刻は一時を回る。もうそろそろ終電の時間だと言うのに、足がかじかんでうまく動かない。駅まではまだ遠い。このままでは終電に間に合わない。僕は歩くペースを上げる。辺りはすっかり静まり返り僕の革靴が地面を蹴る音が夜の街に響く。ただ、ただ歩き続ける。街の隅の街灯の下でしやがみこんでいる女の人とふと目が合う。その瞳は何かを訴えかけるような目をしていて。泣いていたようだった。僕は、こういう時大抵スルーをしてしまう。だが、今日は違う。何故か声をかけなくなる。

「だ、大丈夫ですか？」

びっくりだ。考える前に声が出てしまうのは。彼女は俯いたまま、首を横に振る。何があったのかわからない僕は、どう話していいのかわからず、その場に立ち尽くす：

僕は、来ていたジャケットを脱ごうとするが手がかじかんでうまく脱ぐことが出来ない。やつのことでジャケットを脱ぐことができた。ジャケットを彼女に被せる。それと、同時にハンカチを渡す。今日はたまたま、ハンカチを持っていたなんて言えない：彼女は涙を拭う。僕は彼女の隣に座る。

「何かあったの？」

「…」彼女は小さく頷く。

「あ、僕は、高山 涼平って言います。」

「わ、私は、中沢 涼音と言います。」

彼女は、今にも消えそうな声で言う。

「私には彼氏がいたんです。とても優しく、明るい人でした。そんな彼があんなことするなんて…」

「あんなことって？」

「浮気です。私、見ちゃったんです。彼が浮気してるところを。《いつまでも一緒》とか、言ってくれたのに…そんなことを言ってくれて嬉しかった。でも、私以外にもそういうことを言ってたと思うと許せなくて…」

彼女は泣き出してしまう。

瞳から出てきた涙の粒は、頬をとおり、輪郭に沿って流れてゆく。そして、地面にぽたぽたと落ちていく。僕は立ち上がる。近くの自動販売機で飲み物を買うためだ。暖かいココアを二つ買って、彼女の元へと向かう。

「飲んで」と、僕は彼女の前にココアを置く。彼女はココアを飲む。少しずつ…少しずつ…飲んでいく。僕も彼女の隣に座りながらココアを飲む。体の芯から温まる。しかし、とおりすぎる風は冷たいまま。 「場所を変えようか。」と、僕が一言。

彼女は驚いたように頷く。



きつと僕が、話を聞いてくると思ってなかったんだろう。僕と彼女は方を並べて二十四時間営業のファミリーストランにむかう：

少し離れたところにあかりが見える。あれが目指していたファミリーストランだろう。彼女はとても疲れきっていた。あと少しだから頑張ろうそう言おうとしても、声に出すことは出来ない。

彼女は今にも止まりそうなペースで歩いている。「おぶるから乗って。」

そういうと、彼女は「あとすしなので頑張ります。」

と、言う。初対面の人には、普通こういうことは言わないんだなっことを学ぶ。

今までで、人とあまり接さずに生きてきた。そのせいでどう声をかけたらいいのかわからない。でも、今日は頑張っている方だ。

そんなことを考えているうちにファミリーストランに着く。夜を忘れるような明るさの店内にはいる。身も心も軽くなった気がした。早速店員さんに席まで連れてってもらう。客は僕ら以外にはいない。どこかひっそりとしたところがある。席につく。彼女は疲れきってクタクタになっていた。僕は、ドリンクバーを2つ頼む。

「何か飲む？」と、一言。

「出来れば、コーヒーがいいな。」と、彼女はいう。僕は、びっくりした。この短時間で僕は、彼女とタメ口で話すようになったことに気づいたからだ。僕は、そんなことを考えながらコーヒーをカップにい



れ、席に持っていく。コーヒーを彼女の前に置く。彼女は、コーヒーを一口飲むと話し始める。

「私に、付き合ってくれてありがとうございます。でも、どうしても知らない人を助けようと思ったんですか？」

彼女はマジマジと僕を見つめる。こんなに見つめられたことはないので、ドキドキしながら

「どうしてもほっとけなかったんだ。」と、答える。

「そう。」と彼女は答える。

僕はもう一口と、コーヒーに口をつける。

「私、彼氏にちゃんと別れを告げないで逃げて来ちゃったんだ。今からでも遅くないかな？」

「遅くないよ。きっと、分かってくれるよ。」

「じゃあ、今電話してもいいかな？」

「うん」

プルルルル、プルルルルと、電話をかけ始める。

ガチャ……。どうやら彼は電話に出たみたいだ。

「もしもし、私だよ。涼音だよ。」

「あ、ああ、鈴音か。」

「久しぶりだなわこんな夜遅くにどうしたの？」

「実は、私あなたが浮気しているとを見てしまったの。だから…」

「…」

「別れましょう。」

言い終わると同時に電話は切れる。

彼女はほっとため息をつく。安堵したような顔で僕にこういう。

「別れました。」と。

「ああ、聞こえてたよ。」僕はそう返す。沈黙が訪れる。

「連絡先交換してもいいですか？」と、彼女が言う。

「いいですよ。」と、僕は応える。

「また、何かあったら連絡取りたいので。」

彼女は付け足す。

僕は携帯を出し、彼女のメールアドレスを教えてもらう。入力すると再び沈黙が訪れる…

外の冷たい空気を感じぬ暖かい空気。彼女はウトウトと眠そうにしている。

「家、送ってどうか？」

「でも、もう終電は行っちゃいましたよ。」

「駅でタクシーを拾っていいよ。」

僕は、会計を済ませる。彼女は後ろで見守っている。まるで、飼い犬を見るかのように。

僕と彼女は、店を出る。外の冷たい風に包まれ、彼女は目を覚ます。駅に向かって歩き始める。さつき

来た道に戻る。なんか不思議な気分だ。駅までの道で、思う。彼女の家がどこにあるのかわからない。頑張っただけ聞いてみる。

「あの…」

「ん？」

「どこに送ってほしいのかな？」

「××町かな。」

「××町!？」

「うん。」

「同じじゃん!」

「ほんと?」

「実は、今日よりも前に会ってたりするかもな。」

「そんなことはないよ。」

さっきまでと違い明るい会話が続く。

さっきまでとは違い。駅までの道のりが短く感じられた。

僕は右手を大きく挙げ、通り過ぎようとするタクシーを止める。タクシーのドアが開く。彼女を先に乗せ、僕は彼女に続いてタクシーに乗り込む。「××町にお願いします。」

「はい。」と、運転手が答える。

タクシーが発する。駅の影は少しずつ小さくなり見えなくなっていく。××町は、隣町なので15分もすれば着くだろう。

車内は、暖かかった。そのせいだろう。彼女はすぐに寝てしまった。僕は、眠さと寒さで今にも倒れ込みそうだったが、寝るわけには行かないとがんばった。あれから十分ほどたったのだろうか？彼女が起きる。彼女は自分の家を運転手に教えている。彼女の家は、僕の家から100メートルほど離れたところだった。彼女は、タクシーをおりる。「おやすみなさい。」と、僕に一言いい、僕を見送る。

タクシーは走り始める。僕の家に向けて。家に着く僕はお金を払う。タクシーが走り去る。僕は鍵を開け家に入ると玄関に倒れ込みそのまま眠ってしまった。

眩しい。強い日差しが玄関から入って来る。その光で僕は起きる。携帯を見る。メールが届いている。メールを開く。それは、彼女からのものだった。

「昨日はありがとうございました。あ、あと、タクシー代払いませんでしたね。今度払います。」  
というものだった。返信をする。

「こちらこそ。タクシー代はいりません。」

家近かったので、そのついでなので「と、返す。すると、メールが来る。」

「そうなんですか。では、甘えさせていただきます。もう一度ゆっくり話したいので、お茶でもどうですか？」と、返信が来る。

僕は、「もちろんです！土日ならいつでも空いています。」と返す。

「来週の日曜日はどうですか？」

「それで、いいです！」

僕は、すでにワクワクしていた。これが人生で初のデート？になるからだ。今日は、金曜日。日曜日まであと二日……。そんなことを考えてるよりも、会社行かなきゃ！！慌てて玄関を飛び出す。鍵を閉め忘れる。鍵をしめに帰る。駅に向かって走る。通り過ぎていく風邪がいつもよりも気持ちよく、心地よいテンポで駅までの道を駆け抜けていく。駅に着く。そこから、2番ホームにおりる。△△行きの電車に乗って、3つ先の駅で降りる。駅の東口を出て、すぐ右手にあるのが僕の通っている会社だ。

「ギリギリ間に合ったあ」

僕は、安堵のあまり声を出してしまった。

「先輩！先輩が遅刻するなんて珍しいですね。」この子は、後輩の井上さん。

「ええ、遅れてくないか？」

「遅れてますよ！ほら！」僕の時計は、時間がズレていた……

「ほんとだあ……残業増えちゃうや。」そう言っただけで自分の席に着く。

僕は、企画部署に入っていて、新しいおもちゃをかんがえたりする仕事をしている。

自分の席について、気づく。いつもよりも仕事が少ないことに。ラッキーと思いながら仕事に取り掛かる。チリン。チリン。と鐘になる。いつの間にか昼食の時間になっている。今日の昼食は、持ってきて

ないので、コンビニエンスストアでパンを買って食べる。幸いなことに、この会社の前にはコンビニエンスストアがある。僕は、会社を出てコンビニエンスストアに入る。パンを2つほど取りレジに並ぶ。ピッ！ピッ！

「108円が1点。150円が1点。合計2点で258円です。」

僕は財布を開け、お金を取りし、渡す。

「ちょうどお預かりします。商品です。ありがとうございます。」

会社に戻る。先程買ったパンを口に放り込むかのような勢いで食べる。そして、仕事に取り掛かる。ただひたすらパソコンと向かい合う。昼休みも終わり、オフィスには、カタカタカタと、タイピングの音だけが響く。ふと辺りを見回す。日が暮れている。街は、日が暮れたことも知らないかのように、遊び続ける。仕事が終わわり、パソコンをとじる。急いで、身支度をし、帰る。××町行きの電車に乗る。3つ先の駅で電車を降りる。階段を上り、改札口を通る。西口から出る。ここから家までは、200メートルほどの道のりだ。そう遠くはないので、毎朝歩いて駅まで向かう。朝、走ってきた道のりを今度はゆっくりとしたペースで歩き続ける。街路樹は、薔を膨らませ、いまかいまかと春を待ち続けている。僕は、そんな街路樹を横目に家に向かって歩いていく…

家に着く。玄関の鍵を開ける。靴を脱ぐ。僕の家は、一人暮らしだからとは、言いたくないがあまり綺麗とは言えない。

僕は、テレビの前に腰を下ろす。情性でテレビを見る。最近、高齢者による交通事故が後を絶たな

いみたいだ。正直、僕は車に乗らないしあんまり関係ないと思った。テレビを消し、夕飯を作る。今日は、チャーハンだ。長ネギなどを、みじん切りし、それをフライパンで胡椒を少しかけながら炒める。卵と、ご飯を入れて炒める。これで完成だ。今日はいつもよりうまく出来た。が、今日も悲しく1人でご飯を食べる。夜が来る。彼女から、メールが来る。きっと、明後日のお茶のことだろう。メールを開く。案の定、明後日のことだった。駅前のカフェに1時と言うことだった。

「了解。」と、僕は一言メールを送る。

僕は、友達も少なく、もちろん彼女などいた事がない。だから、服をあまり持っていないのだ。女の人と、二人きりだつていうのにダサイ服装ではいけない。そうだ、明日は休みだし服でも買いにいこう。と、考えている間に睡魔に襲われ、僕は眠りにつく。翌朝いつもよりも、少し早く起きる。朝ごはんは昨日の夕飯の残りのチャーハンだ。テレビを見ながら、それを口に運ぶ。今日は、夕方に雨が降るらしい。それまでに、買い物に行こうと、急いでチャーハンを口に放り込む。寝癖を直し、服を着替えて家を出る。雲ひとつない日だった。これから雨が降ると言われても信じられないほどだ。蕾を膨らませる桜の横をとり、駅前のデパートに向かって歩く。散歩中の人などと挨拶を交わしながら、黙々と歩き続ける。デパートにつく。目当ての洋服を探しにいく。今は、冬と春の境目だからか、冬用の服は半額などとても安くなっている。そんなことよりも僕は、自分にあつた服を探す。パーカーに長ズボンそして、メガネという服装にすることにした。僕は、その服を買い、店を去る。今日は、これ以外にやることか思いつかなかった。これから、家で本でも読んで過ごすつもりだった。家に帰る。ソファに座り、



まだ読んでいない本を読む。僕は、ほんの世界に入り込む。昼飯を食べるのも忘れるほど本の世界に入り込んでいた。本を読み終わる頃には、日が傾きかけていた。沈む洛陽のグラデーションがとても綺麗な夕方だった。僕は、コンビニエンスストアで夕飯を買い食べる。明日に向けて早めに寝る。

朝が来る。いつもよりも少し遅く起きたくらいで、いつもと変わりのない朝だった。

どこか、変わってるところがあると言えば僕がワクワクしていることくらいかな。なんでかって？それは、言うまでもない初めてのデートだからだよ。わくわく、しながらパンをトーストに入れ、コーヒーをいれる。パンを食べながらコーヒーを飲む。そして、昨日買っておいた服に着替える自分なりにはなかなか合っていると思う。イケメンはどんな服を着ても似合うって言うしね。忘れてた、僕はイケメンじゃないんだ。僕は、カフェに向かう。咲きかけた、桜たちが春の訪れを知らせるかのように元気に咲いていた。待ち合わせの10分ほど前にカフェにつく。僕は、心配性な1面もあり、時間丁度にはいけないタイプだ。僕の前をぞろぞろと、通り過ぎていく人達。スマホをいじる人。友達と話がら歩く人。その中で彼女を見つけた。彼女は僕に気づいてないみたいだ。彼女が僕に気づく。手を振ってくる。僕は、手を振り返す。

「待った？」と彼女が一言。

「待ってないよ。今来たところだよ。」と僕は答える。僕は彼女とカフェに入る。

僕と彼女はカフェの1番隅の席に座った。彼女はカフェラテを。僕はコーヒーを頼む。すると、早速

「この前はありがとうございました。」と言う。

「いや、ぜんぜん。気にしないでいいよ。」と、僕は答える。

「ありがとう。」彼女はそう答え、はにかんでみせた。とても明るく、左の頬にエクボができる。そんな笑顔だった。

「趣味とかってあるの？」そう彼女は僕に聞く。

「読書とか映画見ることとかかな。」

「映画！？私も映画好きなの！」

「ほんとに？」

「うん。」

「このあと、良かったら映画でも……」

初めて女の人を誘うから顔がすごい赤くなってたかもな。

「いいよ。行こっ！」

彼女は即答した。

「じゃあ、一息ついてから行こうか。」

「うん。」

僕と彼女は、それぞれ、カフェラテとコーヒーをちょびちょびと飲んでいく。

その中で、お互いの友人の話をしたりしていた。が、僕には友達がいらないと言っていいほど少ないし、

友達との記憶がないから。山田くんって子を想像で作っちゃったことは、彼女には内緒にしとく。ちょっと、その話が終わる頃には二人とも飲み終わっていた。一息ついたので、僕は

「行こうか。」と、彼女をエスコートする彼氏とかでもないのに。会計を済ませる。ここから、500メートルほど離れた映画館に行くことになった。僕は、彼女と歩きながら、彼女を観察する。

艶のかかった長い髪。澄んだ瞳。綺麗な鼻。小さな唇。彼女は、とても美しい容姿をしている。周りから見たらカップルみたいに見えるのだろう。でも、僕らはなんの関係も持っていない人達なんだ。そんなことを考えながら歩き続ける。僕らは、混雑する交差点の人の流れに逆らいながら、何とか映画館につくことが出来た。着いたのは二時頃のことだった。少し前まで真上にあつた太陽は少しずつ傾き始めている。映画館にはいる。僕と彼女はチケットをとるために列に並ぶ。列と言っても4、5人ほどで、そんなに待たずにチケットを撮ることができた。映画のやる4番スクリーンへと向かう。僕と彼女の席は、後ろから3列目のちょうど真ん中の辺りだ。僕と彼女で相談した結果ここが1番見やすいということになったからだ。広告が始まる。僕は、映画が好きただけあって広告もしっかりと見たい。しかし、いつもと違い隣に彼女がいるのでうまく集中できない。いつもよりも長く感じた広告もそろそろ終わるといふのにスクリーンに入ってくる人の流れはまだまだ止まらない。少しずつ、少しずつ人の流れは止まっていく。人の流れはやっと止まり映画が始まる。この映画は、ダメな主人公が社会にでて少しずつ成長していく。そして、結婚して幸せな家庭を気づいていくという物語だ。主人公がプロポーズをするドキドキするシーンがやってきた。相手は迷うことなく結婚することを選んだ。ふと、隣を見

る。彼女は感動のせいか泣いていた。涙脆い所もあるんだな。僕は、再びスクリーンに視線を戻す。映画がクライマックスに近づく周りの人達は、帰り支度を始める。これからが、見どころだつてのに……感動のクライマックスも終わり、スタッフロールが流れ始める。周りの人は足早にスクリーンホールをでていく。僕と彼女は、スタッフロールが終わってから、ゆっくりと席を立ちスクリーンホールをあとにする。外に出る。さっきまで見上げればあった太陽はいつの間にか、ビルとビルの隙間から顔を出していた。僕と彼女は来た道を戻り始める。来た時とは違って、人が少ない。もともとそんなに大きい街ではないけど……。街灯の光で街は輝きを放ち始める。僕達はそんな街を背中に歩き続ける。

はっ。と目が覚める。僕は家のベッドで寝ていた。きつと昨日は緊張のせいで疲れすぎてしまったのだろう。また、普段と変わらない普通の毎日が続く……。仕事場に行き、いつも通り仕事をする毎日。失敗をして怒られたり、寝坊したり、夜遅くまで残業頑張ったり。そんな毎日がただただ過ぎていく。そんな、普通の生活をしていたある日、街で彼女を見かけた。僕は無意識に話しかける。

「や、やあ。元気？」とても不器用な挨拶だ。

「あ、高山くんか。元気だよ。いきなり話しかけてくるから誰かと思ってビックリしちゃったよ。」

「ごめんごめん。今度からは、気をつけるよ。」

「今度は、あるか分からないけどね。」彼女は軽く笑いながらさういう。

「そうだね。」

「そうだ。この前はありがとね。また、一緒にどこか行かない？」

「こちらこそ。え、あ、うん。」

僕はびっくりした。もう誰ともデートなんてしなないと思っていたからだ。今、僕の顔は真っ赤だろうな。恥ずかしい…

「じゃあ、来週の連休どこか空いてるかな？」

「今は、わからないな。ごめん。分かったらまた連絡するね。」

「うん。わかった。あ、もう、時間だ。じゃあね。」

「じゃあね。」

彼女は早足でこの場を去っていく。通り過ぎていく風にゆつてない髪をなびかせながら。僕も仕事場へ。僕は歩きながら考える。次の連休はどこに行くのだろうか。春と言ったら〇〇そういうものか。思いつかない。そう考えているうちに仕事場につき。パソコンと向かいあい仕事に集中する。休憩の合間に連休の休みを確認し、彼女に連絡する。当たり前だが直ぐに返信は来ない。スマートフォンを閉じて、再びパソコンと向かい合う。今日の仕事が終わわり、スマートフォンを見る。彼女からメールが入っていた。

「了解です。私もその日休みでした」  
10時頃に××町駅集合でお願いします。

行先は秘密です。それでは。」

「秘密なんです。楽しみにしておきます。」

そう返信し、会社をあとにする。今日から、彼女とのデートの日まで、会社は運良く休みだった。僕は、またオシャレをすることになるので、服を選ぶにはちょうどいい休みだった。夕飯を作る。お風呂に入る。テレビを見る。そして、寝る。明日は、少し遠いけど電車に乗って、大型ショッピングモールでも行ってみようとか、思いながら眠りにつく。

朝。いつもより少し早めに起きる。ご飯を食べて、着替えて、駅に向かう。ここから5つほど先の駅で降りる。帽子にサングラス、短パン、半袖シャツ、もうすぐ夏なので夏らしいものを買う。

一通りの買い物が終わると、フードコートに行つて、ご飯を食べる。今どきのフードコートには色々な種類の食べ物が沢山だ。僕は、ビビンバを頼み食べる。なかなか美味しい。家で作るものとは味が全然ちがくて、自分の料理の下手さを改めて知る。食べ終わると、そのまま家に帰るために駅に向かう。×町駅行きの電車に乗り、家に帰る。まだ、昼過ぎだが、外は曇り始めいつ雨が降ってきてもおかしくないような色をしていた。今日はいつもより早く起きたせいかな少し眠くなってきた。少し寝ようかと横になる。

屋根に打ち付けるような雨の音で目が覚める。時刻は6時を回っていた。スマートフォンにメールが入っていた。それは後輩の井上さんからだった。

「突然すみません」 どうしても先輩に伝えたいことがあってメールしました」  
実は、先輩のことがずっと好きでした。私と付き合ってください。」

僕は思わず2度見する。夢ではないかとほつぺたをつねってみる。痛い。どうやら現実らしい。僕は、戸惑いながらも返信する。

「ぜんぜん大丈夫だよ。ごめん。少し考えさせてくれるかな。」僕は、何故か保留にしまった。

何故だろう。もしかして中沢さんのこと…考えすぎか…

「夕飯作らなきゃ。」そう呟き夕飯を作り始める。明日は、中沢さんとのデートだ。と、気合を入れて作ってみたオムライス。なかなか美味しい。食べ終わる。食器を洗う。明日の準備を少しする。そして、寝る。

目覚ましがなる。時刻は7時半。外ではセミが鳴き始めている。もうそんな季節かと、支度をする。昨日買った、洋服を着て今日は出かける。ちよつと派手かなとか考えてみたりもするが結局このまま行くことにした。桜が散った道を歩き駅に向かう。駅に着くと彼女は既に待っていた。待たせてしまったかと小走りで彼女の所は向かう。

「待たせちゃった？」と、僕が一言。

「ぜんぜん待ってないよ。」そう彼女は答える。

彼女が改札口へと歩き始める。僕は、彼女について行く。どこに行くか分からないからしようがないなとか思いながらついて行く。4番ホームに降りる。どうやら東京方面に行くわけではなさそうだ。横浜とかでも行くのかなって、電車に乗りながら考えるが横浜を通り過ぎていく。海に行くのかな。



自分でもよくわからない期待が胸に込み上げる。湘南の近くの駅で降りる。歩いて江ノ島でも行くのかな。予想は的中した。江ノ島に行くようだ。江ノ島は以前に何回か行ったことがあるから少しは分かっているつもりだ。

「江ノ島は初めて？」彼女が僕に問いかける。

「いや、何回か行ったことあるよ。」

「そうなんだ。行ったことないと思ってたのに……」

どうやら彼女は僕が行ったことのない所に連れていきかけたらしい。

「さすがに行ったことあるよ。」

「だって見た感じインドア派っぽいじゃん。」

やっぱり、そんな感じの印象があったのかと、少しガッカリする。

「確かにそうだけど、さすがに来たことくらいあるよ……」

「そんなことよりもお腹すいたね。」

彼女が急に話を変えたので、何故か救われた気がした。

「せっかく江ノ島に来たから海鮮丼でも食べようか。」と、僕が言う。

「お、気が合うね。」そう彼女が答える。

僕達は海鮮丼のお店に行き海鮮丼を頼む。

頼んでウェイトレスさんが運んできた海鮮丼にはしらすが入っていた。色は透明でとれたたてというこ

とが分かった。僕と彼女は自分たちの前に置かれた海鮮丼を見て、

「わあ！」

「わああ！」

と、一斉に声を上げる。とても大きかったからだ。僕は脇においてあった割り箸を取り、食べ始める。凄い勢いで口に運んだので、ワサビを丸ごと食べしてしまいむせる……。そんな、僕を見ながら彼女は笑う。オマケに写真まで取られた。でも、そんなことは気にせずに僕は海鮮丼を口に運ぶ。そんな僕を見ながら彼女も海鮮丼を口に運ぶ。彼女は満足と見られる表情で笑みを浮かべる。僕は、海鮮丼を食べながらこんなことを考える。奢ったりしてみようかな……。少しはカッコつけたいし……。でも、海鮮丼って少し高い……。こんなことを考えてる時点でかつこ悪いんじゃない……。何事も無かったようにやるのがカッコイイはずなのに……。考えてる自分が恥ずかしい……。そう考えてるうちに彼女と僕は海鮮丼を食べ終わっていた。彼女が僕を心配そうな目で見ています。きっとぼうつとしていたからだろう。僕は、席を立ちきこちなく伝票を持ってレジに向かって歩く。お会計は、3500円と少し高めだったが、そんなことは気にせずに財布から5000円札を出す。お釣りの1500円をもらう。これで、アイスとかでも……。とか、また考えている自分がいる。こんなに、彼女ののことを考えている自分って……彼女ののことをす……き……？今まで好きな人が、1人しか出来たことない自分は、恋愛という感情が薄れていたのかもしれない。自分に、恋人なんか出来ないし……。と。確か初恋は、小学校の頃だったな……

「お客様！お客様！」はっと意識が戻る。

また考え事であろうつとしていたのだろう……。彼女は心配そうな目でこちらを見ている。僕らは店を出た。

「さつきから、ぼうつとしてるけど大丈夫？」そう彼女が僕に言う。

「うん。大丈夫だよ。ちよつと考え事してただけ。」

「そっか。なら別にいいけど。」

彼女は軽くすねたような口調で言う。僕らは、次にエスカレーターを使って山を登ることにした。

歩いて登るととても疲れるだろうなとか思いながらエスカレーターに乗る。山頂までは、直ぐに着いた。景色は、とても綺麗で、目の前に海が広がり、その上に船が浮かんでいる。

「船小さいね。」彼女がそう言う。

「遠いからね。」僕は、そう彼女に言葉を返す。

僕らは、タコせんべいを食べてみた。想像とは違った味がしたが思っていた通り美味しい。時刻は2時頃。遠くの砂浜に見える人達はさつきよりも少なくなっているのがわかる。僕が座って海を眺めていると、彼女が僕の隣に座った。彼女も海を眺めているみたいだ。僕は彼女の方に目を向けると、彼女は視線に気づいたのだろう。彼女は僕の方を見る。ふと、目が合う2人。

「好きです。付き合ってください。」

「!!」

「!!」

僕は、とても驚いた。僕が無意識のうちに彼女のことを思い、彼女に想いを伝えたからだ。

彼女は

「はい。」

と、少しの迷いもなく答える。僕は、手を繋ぐ。解けぬようにと、僕は彼女の手を握る。彼女もそれに応えて握り返してくる。今日の僕は僕らしくない。風邪でも引いてるのかな？繋かれた手を見ながらそんなことを考える。まるで夢のような浮いた気持ちで沈めようと頑張ってみる。そんなこと無理に近いのに。あれこれ考えているうちに、砂浜まで歩いていった。日は傾きかけている。今は4時頃だろうかそれとも、5時頃だろうか。ビーチに人はいない。砂浜に作られた山を置き去りにして。

波は寄せては返していく。こんな当たり前のことでさえも新鮮に感じた。彼女は僕の手を解き、海に向かって走っていった。

「涼平もこっち来て。」

彼女は手招きをしながらそう言う。何気なく名前で呼ばれたのはとても嬉しい。

「うん。」僕はそう答えて海に向かって歩き始める。

パシャ。彼女が水をかけてきた。

「やったなあ。」と、僕は彼女に向かって水をかけようとする。そんなふたりを置いていくかのように太陽は、海の向こうに沈もうとする。

僕らは、夢が覚めたかのように、はっと目がくれていることに気付く。日はすっかり暮れお腹も減っ

てきた。ご飯を食べてから帰るべきなのか、このまま帰るべきなのか。僕には、考えてもわからない。

ここは、彼女に聞くのが1番いいと思い、

「ご飯食べてく？」そう聞いてみた。

「うん。食べてく。」と、彼女が答える。

この一言さえも何だか新鮮に感じられる。

僕は、彼女と手を繋いでオシャレなレストランの並ぶ通りに向かって歩いていく。

少しオシャレなイタリアンレストランに着く。表の看板には、大きなピザが描かれているお店だ。このお店は、本格的にイタリアの人が料理を作ってくれるからだろうか、少し値段の高いものばかりだ。僕らは、野菜が沢山乗っているピザを頼んだ。昼は海鮮丼だったから、魚介類以外のものにしようと、野菜が沢山のついているものにした。

「ちょっと、トイレに行ってくる。」

と、僕は言い席を立つ。

このあとは、どうするべきかと考えるために少し1人になる時間が欲しかったからだ。このまま帰るべきか、他にどこかに行くべきなのかと迷った。僕は、他にどこかに行くことにした。近くのホテルに泊まるのもいいかもしれないと思った。僕は、トイレを出て席へ向かう。席に近づくにつれて、テーブルの上に置かれたピザは大きさを増す。予想以上に大きくとても驚いた。僕がトイレに言っている間に

彼女がピザを1枚ずつ取り分けて置いてくれた。僕は、席に座って

「いただきます。」

と、手を合わせてから食べ始める。とても辛くてむせる。彼女はそんな僕を見ながらまた、写真を撮る。またか、と心の中で思いながら、今度は何を入れたのだろうとあたりを見ると机に置かれたタバスコが目に入る。

僕は、彼女がイタズラ好きだということが分かった。少しずつだが彼女のことを知ることが出来ていると、僕は嬉しかった。僕は、水を口の中に流し込む。辛さが口の中に残り、君の笑顔が脳裏に焼き付く。

目が覚めると、見覚えのない部屋。隣で寝ているのは彼女。それがわかって少しほっとしている自分がいるが、昨日あれから何があったのかイマイチ思い出せない。窓を開けてみると、そこには海と砂浜があった。この景色に見とれ眺めていると彼女が目覚めました。

「おはよう。今起きたばっか？」と彼女が僕に問いかける。

「おはよう。起きたばっかだよ。で、ここはどこ？」

「昨日のお店の前にあった、ホテルだよ。いきなり寝ちゃったからびっくりしたよ。運ぶの大変だったんだからね。」

「ごめん。ごめん。僕も起きたらここだったからびっくりだよ。」

「今日もどこか行く？」彼女が言う。

「今日は鎌倉でも行こうか、今日は寝ないからね。」

「うん。絶対だよ。」

「うん。絶対……」

少しすると、部屋のドアをノックされた。

どうやら朝食の時間のようだ。

急いで、お風呂に入って着替える。

僕達は食堂へ向かう。



たった一輪の薔薇

---

2022 年 3 月 13 日 第 1 刷発行

作 者 うしじまひろと  
牛島弘登

発行者 高場俊輔

発行所 菊阿文庫出版

〒358-0026 埼玉県入間市小谷田 1524

装丁・菊阿出版社 カバー・菊阿出版社 製本・菊阿出版社

---

L201 Printed in Japan





9784009220343

ISBN4-00-922034-X  
C0193 ¥640E

定価（本体640円＋税）



1920193006407

